

ワ  
ン  
シ  
ー  
ン  
短  
編

4  
4  
4  
号  
室  
の  
押  
し  
問  
答

洲  
濱  
玉  
代

人物

前田裕士 (35) ホテルマン

井上来都<sup>らいと</sup> (25) 客

井上あかり (23) 来都の彼女

清掃員 A

清掃員 B

① ホテル花房 4階廊下

444号室扉前、通せんぼして、手を広げて立つ前田裕士(35)。ホテルマンの制服をきちっと着ている。

アロハシャツ姿、耳と唇にピアスの井上来都(25)、パジャマワンピースに赤っぽい茶髪、口元にほくろのあ  
る井上あかり(24)前田に向かつて  
騒いでいる。

前田「ですから、調査が終わるまではお通し  
できません。別室を用意しましたのでそ  
ちらでお休みください」

井上「調査なんていいから、黙って今までみ  
たいにタダにしろや」

あかり「そーよ、『五つ星幽霊ホテル』なん  
て、SNSで拡散されたくないっしょ？」

前田は眉一つ動かない。

井上「お客様は神様だろうが！ 神様が怪奇  
現象我慢して、3回も泊まって差し上げ  
てるんやぞ」

あかり「早く部屋に入れないと、接客も最悪  
って、口コミしちゃうかんねー」

ため息をつく前田。

前田「井上様、今までの怪奇現象、覚えてい  
らっしゃいますか？」

井上「忘れられるわけねーやろがあ！」

あかり「あかり、ちよー怖かった！」

井上、指を突き出し、

井上「1回目は赤ちゃんの泣き声、天井に顔  
の染み、鏡の裏に謎のお札。夜中に廊下  
から鎧武者の足音、2回目は聖書に『死  
ね』の文字、風呂の蛇口から赤い水」

井上、スマホを突き出す。

井上「それに、女の幽霊や！」

スマホ画面、暗いホテルの部屋に長い  
黒髪を垂らした、死に装束の女が  
映っている。

あかり「今夜のポルターガイストで、お気に  
のブランドバックと水着が破けちゃっ  
たー」

井上、前田に文字盤が割れた金の腕時計を至近距離で見せる。

井上「（巻き舌で）一千万円じゃ足りへんでえ。誠意みせろやコラ」

あかり、くすくすわらう。

あかり「あかりのフオロワー、50万人もいるんだから、こんなホテル、すぐに潰れちゃうわ」

前田、井上の手首を掴み、スマホ画面を触る。写真を上スライドすると、情報が表示される。

前田「この写真、撮影時間はお昼で、暗く加工されてますね。それにこのほくろ」

写真をアップにすると、女の髪の毛の隙間から口元のほくろが見える。あかりと同じ場所である。

井上、前田の手を振りほどく。

あかり、口元をぱっと手で覆う。

あかり「ぐ、偶然よ！」

前田、胸ポケットから金字で『ホテル花房』と印字された黒い手帳を取り出す。

前田「1回目。まずは赤ちゃんの泣き声ですが、その日、赤ん坊を連れてお客様は確かにいらつしやいませんでした」

睨みをきかせる井上。井上の後ろに口元を押さえたまま隠れるあかり。

前田「しかし、隣室に発情期の猫を連れてきたお客様がいらつしやいました」

井上「はあ？」

あかり「私たちが、聞き間違えたっていうの？」

前田「天井の顔の染みですが、上の階のお客様、団体ホスト様の慰安旅行だそうです。がシヤンパンタワーを全て倒してしまつた、と、井上様が帰った後に謝罪がありました」

井上「たまたま染みが顔の形になつたって言いたいんか！？」

前田「次に、謎のお札について。<sup>44</sup>号室に井

上様の前日にご宿泊されていた祈祷師のお客様から、鏡の裏にお札を忘れてないか、とのお問い合わせがありました」

井上「そんなもん忘れる奴、いるわけないやろ！」

前田「鏡の裏に貼ると結界の効果が増すそうです」

井上「無視すんなや！」

前田「最後に、鎧武者の足音ですが」  
唾をのむ井上とあかり。

前田「この先の<sup>460</sup>号室に鎧武者同好会の方々がお泊りでした。撮影が長引き、深夜にこの廊下を通過って部屋に戻られたそうです」

あかり「そんな偶然、1日に重なるわけないじゃない……」

前田「重なってしまったのです」

井上「い、いまさら返金なんてせえへんぞ」

前田「1回目は仕方ありません。偶然とはい

え、井上様が恐怖を覚えられたのは事実。他のお客様を把握していなかった当ホテルにも落ち度がございます」

前田、声量を上げ、

前田「わずかに、ですが」

唸る井上、唇を嚙んでいるあかり。

前田、手帳をめくる。

前田「問題は2回目です。聖書の落書きは比較的新しく、赤い水は絵の具が蛇口に付着しておりました」

前田、井上のスマホを指さす。

前田「そして、そのニセ幽霊」

前田、口元を緩める。

前田「誠意を見せるのはどちらでしょうか」  
あかり「いいがかりよ！」

前田「言いがかりかどうか、今回の調査で明らかにあります。当ホテルは、客室に刃物は置いておりません」

青筋を立て、前田を睨む井上。

前田「水着やバッグの繊維が付着したハサミ



が、井上様の荷物から見つかれば……」

井上、後ろポケットを探り、ナイフの柄を後ろ手で握る。

井上「……なめてんじゃねえぞ」

<sup>444</sup>号室が開き、清掃員A・Bが出てくる

清掃員A「調査、終わりましたー」

清掃員B「ハサミや刃物は見つかりませんでしたー  
した」

前田「そうでしたか、お疲れさまでした」

前田、振り返り、

前田「お待たせして申し訳ありません井上様、どうぞお入りに……」

井上とあかりはいない。

清掃員A「あれ、さっきまで騒いでましたよね？ クレーマーカップル」

前田、目じりを下げ苦笑。

前田「幽霊みたいに、消えちゃいました」

誰もいない廊下。非常口マークが光る。